

大学生のキャリア発達の基礎スキルと コンピテンス自己評価

前田 健一・新見 直子¹
(2004年9月30日受理)

Self-perceptions of basic skills for career development and competence in undergraduate students

Kenichi Maeda and Naoko Niimi

This study was designed to investigate the relationships among basic skills for career development, competence, and self-esteem in undergraduate students. Ninety-three students (41 male, 52 female) participated in this study. Results indicated that high self-esteem students scored significantly higher than low self-esteem students on self-perceptions of four basic skills for career development (communication, exploration of information, future planning, and decision-making) and of four domains of competence (intelligence, interpersonal relationship, health, and volition). Moreover, communication and exploration of information were positively correlated to interpersonal relationship. Future planning and decision-making were positively correlated to volition.

Key words : basic skills for career development, self-esteem, competence

キーワード：キャリア発達の基礎スキル、自尊感情、コンピテンス

問題と目的

近年、キャリア発達の視点から学校教育の中で児童生徒の職業観・勤労観を形成し、自分の進路を探索し決定するための基礎的なスキルや能力（以後、キャリア発達の基礎スキルとする）を身に付けさせることが求められている。キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議（平成16年1月28日答申）は、職場体験やボランティア活動及び教科学習などを通して児童生徒に職業観・勤労観の形成に関連する能力を身に付けさせることが積極的に職業選択に取り組み、生涯にわたるキャリアを形成する基盤となると考えている。また、国立教育政策研究所生徒指導研究センターでは、職業観・勤労観の形成に関連する能力を「人間関係形成能力」、「情報活用能力」、「将来設計能力」、「意思決定能力」の4つの領域に大別し、各学校段階において身に付けることが期待される能力・態度を具体的に示している。本研究ではこれら4つの能力領域に基づいてキャリア発達の基礎スキルを捉える。

人間関係形成能力とは、他者の個性を尊重し、自己の個性を發揮しながら、様々な人々とコミュニケーションを図り、協力・協同してものごとに取り組むための能力である。情報活用能力とは、学ぶこと・働くことの意義や役割及びその多様性を理解し、幅広く情報を活用して、自己の進路や生き方の選択に生かすための能力である。将来設計能力とは、夢や希望をもって、将来の生き方や生活を考え、社会の現実を踏まえながら、前向きに自己の将来を設計するための能力である。意思決定能力とは、自らの意思と責任でよりよい選択・決定を行うとともに、その過程での課題や葛藤に積極的に取り組み克服するための能力である。キャリア教育は、これら4つの能力領域に関するキャリア発達の基礎スキルを小学校の段階から習得させることによって、職業的発達を促し、将来の職業選択を適切に推進することを目指している。本研究では、高等学校段階で育成することが期待されている具体的な能力・態度を参考に表1に示すキャリア発達の基礎スキル尺度を独自に作成した。

ところで、現在大学生である青年は、キャリア発達の基礎スキルを意図的に習得させようとするキャリア

¹広島大学大学院教育学研究科研究生

教育を受けていない。しかし、小学校から高校までの各学校段階における役割や家庭での役割などを通してキャリア発達の基礎スキルを身に付けてきたと推測される。事実、大学生を対象とした2つの研究(Blustein, 1989; 古市, 1995)では、キャリア発達の基礎スキルが職業選択と関連することを実証している。

キャリア発達理論を提唱したSuper (1980) は、キャリアを仕事や仕事以外での様々な役割(例えば、学生や職業人、市民や余暇人)として捉えた。本研究の対象者である大学生は、学生、子ども、余暇人など複数の役割を果たしながら、自分の能力や興味に適した職業を探索し、職業選択に取り組むと思われる。能力と役割の関連についてSuper (1980) は、能力や興味が役割と合っている者ほど、その役割に満足し、他の役割もうまく果たすと示唆している。例えば、特定の役割を果たすために必要な能力をもっていると認識すると、その役割を果たす自信が増大するだけでなく、他の役割に対する有能感も増大する。その結果、自己の能力や価値に対する自尊感情も高揚すると推測される。

自尊感情とは、自己概念に含まれている情報について評価することであり、評価感情を伴う。すなわち、自分がこうありたいと価値を置いている理想の自己に基づいて、現実の自己を評価することである。現実の自己が理想の自己と比較的一致していれば自尊感情は高くなり、理想の自己から大きくずれていけば自尊感情は低くなる。Resnick, Fauble, & Osipow (1970) は、大学生を対象に職業選択と自尊感情の関連を検討している。自尊感情高群と低群を比較した結果、自分の将来に対する確信度は、高群が低群よりも有意に高かった。また、Munson (1992) は、高校生を対象に5つの役割(学生、職業人、市民、家庭人、余暇人)の重要度と職業アイデンティティについて、自尊感情高群と低群の間で比較検討した。その結果、自尊感情高群は低群よりも、学生と家庭人としての役割の重要度を高く評価し、仕事に関する明確で安定したイメージをもっていた。これら2つの研究結果は、少なくとも、青年の自尊感情が職業選択やキャリア発達の基礎スキルと関連することを実証している。

Super (1957) は、職業的成熟と職業的自己概念を理論の中心概念として、自己概念の発達という観点から職業的発達の過程を理論化した。上述の職業選択やキャリア発達の基礎スキルに関する現実自己や自己概念は、職業的自己概念に相当すると考えられる。本研究では、職業的自己概念をキャリア発達の基礎スキルの観点から捉えるだけでなく、大学生の一般的な自己概念を4つのコンピテンス領域から捉える。

本研究の目的は以下の3つである。第1目的は、キャリア発達の基礎スキルに関する自己評価(職業的自己概念)について、自尊感情高群と低群を比較検討することである。先行研究(Munson 1992; Resnick et al., 1970)の結果を参考にすると、自尊感情高群の職業的自己概念が低群よりも高いと予想される。第2目的は、一般的なコンピテンスに関する自己評価(自己概念)について、自尊感情高群と低群を比較検討することである。これによって、大学生の自尊感情は4つのコンピテンス領域(知的・学業的、対人的・社会的、身体健康・運動能力、意志力・行動力)のいずれの自己概念とより密接に関連するのかを明らかにする。さらに、第3目的として、キャリア発達の基礎スキルに関する自己評価(職業的自己概念)とコンピテンスに関する自己評価(自己概念)の相関関係を検討する。

方 法

1. 対象者 心理学の授業を受講している大学生93名(男性41名、女性52名)を対象に、2回の授業に分けて調査した。

2. 実施時期 2004年5月と2004年7月の授業時に調査を行った。

3. 手続き 2回の調査は、いずれも授業時間の一部(約15分~20分)を使用して集団実施した。第1回の調査では自尊感情尺度を実施した。第2回の調査ではコンピテンス自己評価尺度とキャリア発達の基礎スキル尺度を実施した。

4. 測定尺度と得点化 以下の3尺度を使用した。

(1) キャリア発達の基礎スキル尺度: キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議の「児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために」(平成16年1月28日答申)の中から、高等学校段階で育成することが期待される具体的な能力・態度を参考に独自に作成した(表1参照)。表1に示すように、キャリア発達の基礎スキル尺度は4項目ずつの4下位尺度(人間関係形成、情報活用、将来設計、意思決定)から構成されている。

各項目の内容や行動をどの程度できると思うかについて5段階(1:まったくできない, 2:できない, 3:どちらともいえない, 4:できる, 5:非常にできる)で評定させた。4つの下位尺度得点はいずれも1項目あたりの平均得点であり、得点範囲は1点から5点であった。各下位尺度の得点が高いほど、各下位尺度のスキルを高く自己評価していることを意味する。

表1 キャリア発達の基礎スキル尺度項目

人間関係形成
1. 自分と違う考え方をもっている人とでも友だちになる
3. 自分の考えていることを人にきちんと伝える
10. 友だちや恋人とケンカをしたとき、お互いの意見を調整しながら仲直りをする
15. 友だち、先生、親などと話をするとき、その場にあった態度や言葉遣いをする
情報活用
5. やりたいことがいくつかあるとき、それぞれの情報について検討してから決める
7. 希望する進路先で、実際にどんなことをしているのかを具体的に知っている
9. 好きな科目や興味のあることと、将来の仕事とを関連づけて考える
13. 自分の知りたい情報を、本・雑誌やインターネットなどを使って集める
将来設計
6. 自分で出来ることについては、責任をもってやり遂げる
11. すぐに出来ることから順番に考えて、計画的に目標を達成する
12. 集団で何かをするとき、自分のすべきことを考えて行動する
16. 計画に問題が起きても、計画を修正して問題に対処する
意思決定
2. 迷って決めたことでも、自分で決めたことは最後までやり通す
4. 何かを決めるとき、人の意見に従うのではなく、自分なりの結論を出す
8. 何か問題が発生したとき、それを解決するための解決方法をいくつか考える
14. 自分の目標を達成するまでに、多少の障害があってもあきらめない

(2) 自尊感情尺度：Rosenberg (1965) の作成したSelf Esteem Scaleを邦訳した山本・松井・山成 (1982) の自尊感情尺度10項目を使用した (表2参照)。各項目内容が自分にあてはまると思う程度を5段階 (1：まったく、あてはまらない, 2：あまり、あてはまらない, 3：少し、あてはまる, 4：わりと、あてはまる, 5：とてもよく、あてはまる) で評定させた。逆転項目の得点を変換した後、1項目あたりの平均得点を算出し、自尊感情得点として使用した。したがって、自尊感情得点は1点から5点までであり、得点が高いほど自尊感情が高いことを表す。

表2 自尊感情尺度項目

1. 少なくとも人並みには、価値のある人間である
2. いろいろな良い素質をもっている
3. 敗北者だと思ふことがよくある *
4. 物事を人並みには、うまくやれる
5. 自分には、自慢できる場所があまりない *
6. 自分に対して肯定的である
7. だいたいにおいて、自分に満足している
8. もっと自分自身を尊敬できるようになりたい *
9. 自分は全くだめな人間だと思ふことがある *
10. 何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思ふ *

注) *印は逆転項目を表す。

(3) コンピテンス自己評価尺度：4つの領域 (知的・学業的, 対人的・社会的, 身体健康・運動能力, 意志力・行動力) に対するコンピテンス自己評価を測定する尺度を独自に作成した (表3参照)。表3に示すように、コンピテンス自己評価尺度は4項目ずつの4領域から構成されている。

各項目内容が自分にあてはまると思う程度を5段階 (1：ぜんぜんあてはまらない, 2：あまり、あてはまらない, 3：少し、あてはまる, 4：わりと、あてはまる, 5：とてもよく、あてはまる) で評定させた。4領域の得点はいずれも1項目あたりの平均得点であり、得点範囲は1点から5点であった。各領域の得点が高いほど、各領域のコンピテンス評価が高いことを意味する。

表3 コンピテンス自己評価尺度項目

知的・学業的
1. 記憶力が良い
5. 集中力がある
9. 発想力がゆたかである
13. 頭の回転がはやい
対人的・社会的
2. 人の気持ちを大切にす
6. リーダーとして活躍する
10. 気軽に人と話せる
14. 人と協力できる
身体健康・運動能力
3. 力が強い
7. 動きがすばやい
11. 健康である
15. 器用である
意志力・行動力
4. ねばり強い
8. 好奇心が強い
12. 実行力がある
16. 自分に自信がある

結 果

1. 群構成 自尊感情の平均得点 ($M = 3.25$) の上下に基づいて対象者を分類し、高群と低群を構成した。その結果、高群46名 (男性23名, 女性23名) と低群47名 (男性18名, 女性29名) となった。なお、自尊感情得点について性差があるか否かを検討するため、 t 検定を行った結果、有意差は認められなかった。

2. 群間比較 4つのキャリア発達の基礎スキル、4つのコンピテンス自己評価の8得点ごとに2 (群：高群, 低群) \times 2 (性別：男性, 女性) の分散分析を行った。

まず、表4に示すキャリア発達の基礎スキル尺度の平均得点に基づいて分散分析を行った。その結果、人間関係形成では、群の主効果が有意となり (F

(1,89) = 17.41, $p < .001$), 高群 ($M = 3.91$)が低群 ($M = 3.45$)よりも有意に高かった。情報活用でも, 群の主効果が有意となり ($F(1,89) = 5.56, p < .05$), 高群 ($M = 3.87$)が低群 ($M = 3.58$)よりも有意に高かった。将来設計でも, 群の主効果が有意となり ($F(1,89) = 5.56, p < .05$), 高群 ($M = 3.87$)が低群 ($M = 3.58$)よりも有意に高かった。意思決定でも, 群の主効果が有意となり ($F(1,89) = 7.12, p < .01$), 高群 ($M = 3.73$)が低群 ($M = 3.40$)よりも有意に高かった。

表4 キャリア発達の基礎スキルの平均得点 (SD)

		高 群	低 群
人 間 関 係 形 成	男性	3.80 (0.39)	3.40 (0.52)
	女性	4.01 (0.50)	3.49 (0.60)
情 報 活 用	男性	3.85 (0.63)	3.61 (0.42)
	女性	3.89 (0.34)	3.55 (0.72)
将 来 設 計	男性	3.95 (0.59)	3.39 (0.45)
	女性	3.77 (0.51)	3.46 (0.69)
意 思 決 定	男性	3.71 (0.56)	3.33 (0.56)
	女性	3.75 (0.45)	3.47 (0.65)

次に, 表5に示す4つのコンピテンス自己評価尺度の平均得点に基づいて分散分析を行った。その結果, 知的・学業的領域では, 群の主効果が有意となり ($F(1,89) = 20.22, p < .001$), 高群 ($M = 3.37$)が低群 ($M = 2.82$)よりも有意に高かった。また, 群と性別の交互作用の有意傾向がみられた ($F(1,89) = 3.43, p < .10$)。対人的・社会的領域では, 群の主効果が有意となり ($F(1,89) = 10.49, p < .005$), 高群 ($M = 3.59$)が低群 ($M = 3.16$)よりも有意に高かった。また, 性別の主効果が有意となり ($F(1,89) = 4.17, p < .05$), 女性 ($M = 3.51$)が男性 ($M = 3.24$)よりも有意に高かった。身体健康・運動能力の領域では, 群の主効果が有意となり ($F(1,89) = 9.88, p < .005$), 高群 ($M = 3.29$)が低群 ($M = 2.83$)よりも有意に高かった。意志力・行動力の領域では, 群の主効果が有意となり ($F(1,89) = 16.90, p < .001$), 高群 ($M = 3.57$)が低群 ($M = 3.08$)よりも有意に高かった。また, 性別の主効果が有意となり ($F(1,89) = 5.10, p < .05$), 男性 ($M = 3.46$)が女性 ($M = 3.19$)よりも有意に高かった。

表5 コンピテンス自己評価の平均得点 (SD)

		高 群	低 群
知 的 ・ 学 業 的	男性	3.54 (0.46)	2.76 (0.69)
	女性	3.20 (0.49)	2.87 (0.63)
対 人 的 ・ 社 会 的	男性	3.35 (0.59)	3.14 (0.63)
	女性	3.84 (0.49)	3.19 (0.70)
身 体 健 康 ・ 運 動 能 力	男性	3.35 (0.71)	2.82 (0.70)
	女性	3.24 (0.66)	2.84 (0.69)
意 志 力 ・ 行 動 力	男性	3.72 (0.58)	3.19 (0.54)
	女性	3.41 (0.46)	2.97 (0.59)

001), 高群 ($M = 3.57$)が低群 ($M = 3.08$)よりも有意に高かった。また, 性別の主効果が有意となり ($F(1,89) = 5.10, p < .05$), 男性 ($M = 3.46$)が女性 ($M = 3.19$)よりも有意に高かった。

3. 相関分析 キャリア発達の基礎スキルとコンピテンス自己評価の関連を検討するため, すべての対象者のデータを使用して相関係数を算出した。表6は, 4つのコンピテンス自己評価, 4つのキャリア発達の基礎スキルの8得点間の相関係数を示したものである。表6から分かるように, 人間関係形成と情報活用は対人的・社会的領域と, 将来設計と意思決定は意志力・行動力の領域とそれぞれ強い正相関を示した。

表6 得点間の相関係数 (N=93)

	知的学業	対人社会	身体運動	意志行動
人間関係形成	.34**	.59**	.26*	.37**
情報活用	.32**	.41**	.14	.36**
将来設計	.56**	.36**	.31**	.60**
意思決定	.53**	.51**	.38**	.60**

* $p < .05$, ** $p < .01$ 。

考 察

群間比較の結果, まず, 4つのキャリア発達の基礎スキルでは, すべての基礎スキルにおいて自尊感情高群が低群よりも有意に高い得点を示し, 予想を支持する結果となった。同様に, 自尊感情高群は低群よりも, 4つのコンピテンス自己評価得点のいずれにおいても有意に高い得点を示した。さらに, 相関分析の結果, 人間関係形成や情報活用は対人的・社会的コンピテンス領域と, 将来設計や意思決定は意志力・行動力のコンピテンス領域とそれぞれ強く関連することが明らかになった。

Munson (1992) は, 高校生を対象にして, 自尊感情高群の職業的アイデンティティ尺度得点が低群のそれよりも高いことを示した。この結果は, キャリア発達の基礎スキルに関する本研究の群間比較の結果と一致する。しかし, Munson (1992) と本研究の間には, 3つの相違点がある。第1に, 職業的アイデンティティ尺度 (Munson, 1992) は, 職業に関連した目標, 興味, パーソナリティ, 能力等の多様な18項目から構成されていた。それに対して, 本研究で扱ったキャリア発達の基礎スキルは, Munson (1992) の職業的アイデンティティ尺度を構成する要素のうち, 能力の側面だけを取り上げている。第2に, Munson (1992) の職業的アイデンティティ尺度は

総合的な単一尺度であったが、本研究で扱ったキャリア発達の基礎スキルは職業に関連する能力やスキルを4つの側面に分けて具体的に捉えている。第3に、Munson (1992) の研究では高校生が対象であったが、本研究では大学生を対象にした。大学生の方が就職等の職業選択を間近に控えているので、職業に直結した能力やスキルの評価に敏感になると思われる。これらの相違点を考慮すると、職業的アイデンティティ尺度得点において自尊感情高低間に差を見出したMunson (1992) の結果は、能力やスキル以外の理想の将来像や職業観あるいはパーソナリティなどの群間差を反映していた可能性が生じる。その意味で、本研究の結果は、職業に関連する能力やスキルに限定した場合にも自尊感情の高低間に差が生じることを明確に示した。自尊感情高群は低群よりも、職業的能力やスキルについて高い有能感をもち、ポジティブな職業的自己概念を形成しているといえる。

一般的な自己概念に相当すると考えた4つのコンピテンス領域においても、自尊感情高群は低群よりも高い得点を示した。自尊感情を扱った遠藤 (1992) の研究では、大学生の理想自己と現実自己間のズレ得点と自尊感情の相関係数を算出した。その結果、重要度の高い領域でのズレ得点が重要度の低い領域のズレ得点よりも、自尊感情と強い負相関を示した。本研究では、4つのコンピテンス領域のすべてにおいて自尊感情の高低間に差がみられたが、遠藤 (1992) の相関分析では領域間の重要度によって異なっていた。本研究の結果では4つの領域間に相違がみられなかったが、遠藤 (1992) では領域間に相違がみられたことについては、以下の可能性が考えられる。遠藤 (1992) は、学業・仕事、家族関係、その他の人間関係、パーソナリティ、ライフスタイル、資産・物質、身体の7領域にわたって自己認知に関係する項目を作成している。領域の範囲が多様で広いために、領域間の重要度も大きく異なったのではないかと考えられる。それに対して、本研究で扱った4つのコンピテンス領域は、知的・学業的、対人的・社会的、身体健康・運動能力、意志力・行動力であり、いずれも大学生にとって重要な領域であるといえる。要するに、本

研究が重要度の高い領域ばかりを取り上げて自己評価させたことによって、4つのコンピテンス領域間に結果の相違がみられなかったのであろう。

引用文献

- Blustein, D. L. 1989 The role of goal instability and career self-efficacy in the career exploration process. *Journal of Vocational Behavior*, 35, 194-203.
- キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議 平成16年1月28日答申 報告書：児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/023/toushin/04012301/002/010.pdf.
- 遠藤由美 1992 自己認知と自己評価の関係：重みづけをした理想自己と現実自己の差異スコアからの検討 *教育心理学研究*, 40, 157-163.
- 古市裕一 1995 青年の職業忌避傾向とその関連要因についての検討 *進路指導研究*, 16, 16-22.
- Munson, W. W. 1992 Self-esteem, vocational identity, and career salience in high school students. *The Career Development Quarterly*, 40, 361-368.
- Resnick, H., Fauble, M. L., & Osipow, S. H. 1970 Vocational crystallization and self-esteem in college students. *Journal of Counseling Psychology*, 17, 465-467.
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton Univ. Press.
- Super, D. E. 1957 *The psychology of career*. New York: Harper & Row.
- Super, D. E. 1980 A life-span, life-space approach to career development. *Journal of Vocational Behavior*, 16, 282-298.
- 山本眞理子・松井 豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 *教育心理学研究*, 30, 64-68.